

2025

HARVARD-YENCHING
INSTITUTE WORKING
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of chapters for an autoethnographic fiction provisionally titled *Futsuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual): Alice's Adventures in Multilingual Japan*, scheduled for publication in 2027; from June 2024 to February 2027, approximately twenty chapters, including a prologue and an epilogue, are being prepared in Japanese. Based on the author's personal experiences, the work follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese, and portrays her everyday use of multiple languages. Japan is often misunderstood as a "monolingual society," but this work demonstrates that it is, in fact, a "multilingual society," critically reexamining the notions of ordinariness and equality in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored through narratives of homeland loss and regeneration; at the same time, the work encourages critical reflection on our unawareness of the privileges of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies structuring our lives, aiming to evoke readers' own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, the project seeks to explore the possibilities of creating a socially just world, and, in preparation for a future English edition—and to explore the possibilities and limits of translation—English versions of all chapters will also be included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Ordinariness and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約: 本作は、2027 年度に出版予定の自伝的民族誌的フィクション『ふつうのマルチリンガル——多言語社会日本におけるアリスの冒険』（仮題）の各章の初稿であり、2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグとエピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が日常的に多言語を使う姿を描き、日本がしばしば「モノリンガル社会」と誤解される一方で、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」の概念を言語使用の観点から批判的に問い直す。多様性・共生・植民地主義や戦時加

害性・言葉の力といったテーマを故郷喪失と再生の物語を通じて描き出すとともに、「日本語」や「英語」の特権性や生活を形づくる言語的ヒエラルキーへの無自覚さについて批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を呼び覚ますことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的に公正な世界を構想する可能性を探る試みであり、将来の英語版出版に備えると同時に翻訳の可能性と限界を探るために、全章に英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつう／平等主義、植民地主義・戦時加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

6 湘南 Shonan 海を渡る猫のように

白い服のひとは暗殺された

海までの道を走る、波の上を走る、誰にもつかまらない。

高校に入って最初の夏休み、体育祭の準備のために登校しようと、朝ごはんのパンをかじり、牛乳を飲みながら何気なくテレビを見た。飛行機のタラップの先に白い服を着たひとがうつ伏せに倒れている。顔は見えない。腕や脚、胴体から生命がすっかり抜けて、重力に抱かれている。血が流れている。シダが低い声で「撃たれた、白昼に。暗殺だ、白昼に」とつぶやく。マニラの空港で、たくさんの人が見守るなかで、そのひとは自ら予言したとおりに一瞬で生命をうばわれた。独裁政権に脅威を与える野党のリーダー。亡命先のアメリカから帰国。故国の地に足をつける前に死んでしまった。画面が凍りつき、心臓に刺さる。カバンをつかんで駅に向かう。待ち合わせた友人の制服のブラウスが、いつもよりも白く青ざめて見える。

最寄りの駅から住宅街の入り組んだ道を抜け、なだらかな坂を登ったところにあるその「進学校」のモットーは「Always do what you are afraid to do!!」¹(最も困難な道に挑戦せよ)なのだけれども、わたしはそれを知らない。「生徒一人ひとりにおける極めて高い文武両道」を謳っている。それは知っている。生まれ変わったら「体育」のない人生を送りたいと願ってやまないのに、水泳やなわとびが必修で、ノルマが達成できなければ補習があり、「補泳」や「なわとび友の会」という納得しがたい名前のもとで達成するまで続く。先生はむしろ丁寧に教えてくれるのだけれども、ともかく取り組み続けなければならないのは、いつか翼が生えて空を飛べると信じなければいけないくらい虚しい。でも、できる子たちはあっさり楽しそうにやってのける。

そのころは子どもがたくさんいて、この公立高校も生徒であふれていた。ひとつの学年に五百四十人、クラスには四十五人がいて、「男女」比率は「男子」がすこし多かった。ざわざわした人混みが苦手なわたしは教室をぬけだして、図書室をさまよい、数万冊の本の森に埋まり、ときどき現れるシダに顔を覆ってもらいながら、文字のなかに溶けこんで眠っていた。そんなわたしにもひとり友人がいる。一年生合宿のとき、突然生理が始まりこまっていたわたしに何もいわずにナプキンを差し出してくれた子で、わたしとは正反対に体育が得意で、なわとびも左右に回りながら三重跳びをかる

¹ この言葉はアメリカの思想家ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) の言葉とされる。

がるとこなす。この友人に誘われて、昼休みには海へ向かって走り出すのだけれど、海は遠すぎていつもヤクルト工場で折り返して戻ってくるのだった。

春休みのある日、なわとび補習を終えてひとりでハワイに飛び立った。^{サバティカル}研究休暇で滞在中のおとうさんが迎えてくれ、同僚のアメリカ人サリー・ナカマさんに会う。褐色の肌に黒い瞳、栗色がかった黒髪の彼女は、わたしの目を見て話し、話し終わるときに目元にきゅっと力を入れる。ある日、Pearl Harbor Visitor Center (真珠湾訪問センター)に連れて行ってもらう。サリーさんの祖父が消防士で、一九四一年十二月七日早朝^{Imperial Japanese Navy}²の大日本帝国海軍による奇襲で負傷し、その後は日系アメリカ人として強制収容所に入れられたと彼女から聞かされる。老いてからも、亡くなるまで、ときおり発作に苦しんでいたという。「真珠湾は先住民の言葉では Wai Momi と呼ばれて、ハワイ王朝時代は豊かな漁場だったのに、アメリカ支配下で海軍基地ができ、海底も汚れてしまったの。オキナワはどうなっているかな」と不意にきかれ、答えられずにいた。

どこにも着かない道

高校の教室で眠りながら、鏡をずっと通り抜け、鏡の国の部屋に軽やかに降り立つ。こっちには暖炉から追い立てる大人などいない。鏡越しにわたしを見つめる大人がいても、つかまえることはできない。「のんびりしてはだめ！ 急がないと、このおうちのほかの場所がどうなっているか見る前に、鏡の向こうに戻らなくてはならなくなる！」まずは庭を見てみようと思ひ、部屋を飛び出す。階下へかけおりる。正確には走っているわけではなく、階段の手すりに指をそえるだけで、足が階段にふれず、ふわりと浮かぶように降りていく。しゃべるお花たちがいる庭で、タイガーリリーに出会う。「苗床がやわらかすぎると、花はいつも眠ってしまう。お花たちが語るためには固い地面が必要だよ」と教えてくれる。そのうち、赤の女王がやってきた。

「あなた、どこからきたの？」と赤の女王が問いかける。「それで、どこに行くつもりなの？ 顔をあげて、しっかりと話しなさい。指ばかりいじりまわしてはいけないわよ」その鋭い目を避けながら、わたしは道に迷ってしまったことを一生懸命に説明する。けれども女王はくすりと笑い、「あなたの道ですって？ そんなもの、この国にはありません。ここの道はすべてわたしのもの。でも、まあ、どうしてここに来たのかしら？」と少しやさしい声でたずねる。「ひざをまげておじぎをなさい。つぎに何を言おうか考えているあいだにね。時間の節約になるのよ」目の前には奇妙な田園が広がり、まっすぐな小川と小さな垣根が囲む区画が、大きなチェス盤のように広がっている。ハートの女王とちがって、赤の女王はやたらと首ははねない。

もしここで歩兵や、できたらクイーン^{ポーン}になれば、それはそれで面白いかもしれない。「それならたやすいことよ」と女王がほほえむ。「お望みなら、白の女王の歩兵にし

² ハワイ現地時間。日本時間では一九四一年十二月八日未明。

てあげましょう」わたしは、二つ目のますから始め、八つ目まで進めばクィーンになれると教えられる。その瞬間、女王はわたしの手を取り、突如として走り出す。彼女の速さは圧倒的で、ついていくのがやっと。それなのに、女王は「もっと速く！ もっと速く！」と叫び続ける。周囲の木々や景色はどれだけ走っても少しも変わらない。不思議なことに世界が静止しているようで、どんなに速く走っても何も追い越せない。「もっと速く！ 話そうとしないで！」女王がさげんでいる。話そうなんて思っていない。でももう二度と話せないように思う。それほど息が切れている。

赤の女王はチェス盤の上でわたしが「負けない」ように指南する。もっと速く走りなさい、あなたは成績が良いのだから名前のある大学を受験しなさい、浪人は許さない、学部はどこでもよい。医学と芸術はだめ、すべての道はわたしのもの。あなたの道などありえない。わたしの言うことを聞かなくてもよい。そのとき、あなたはどこにも行けない。わたしの言うとおりにしなさい、あなたのためよ。女王の呪いは温かく柔らかく、ほどけない真綿のようにわたしに絡みつく。でも、大丈夫。わたしはいつか逃げられる。いまは女王の機嫌をそこねないように走りつづけよう。呪いが染み込まないように、からだを軽くしておこう。悪いものがわたしのなかにたまらないように、食べ物を四つに分けて、一つだけ食べるようにしよう。くるわないように。

Some island in the South Pacific

南太平洋の島、南方の島、人びとの島

「アリス、目を覚まして」とシダに揺すぶられ、机から顔を上げると、国語の先生が立っていた。片目に義眼を入れている先生の動かないほうの目をぼんやり見つめていると、「はい、これ」とノートを返される。授業中に眠りつづけるわたしを心配して、この国語の先生と担任の英語の先生が、自習ノートを用意してくれたのだ。ふだんの定期試験では成績が良いのに、大学入試の模試になると息が苦しくなって溺れてしまう。言葉へのこだわりが強く、言葉があふれてしまう。あふれる水を掬いとるように、A4 サイズの見開きに、片側には日本語の新聞コラムを切り貼りして自分の意見を書き、もう片側には英語の小説の気になるフレーズを写していく。それを提出すると、ふたりの先生からサインや短いコメントが書き込まれる。風がおとずれる。

わたしは日本の小説を「翻訳」、つまり英語で読むことにこだわっている。理由はわからない。小学校のころにハートの女王から英語の本を奪われ、洞窟の図書館で日本語の本ばかりを読まされていたことが、肺に染みだす水のようにわたしを傷つけてきたからかもしれない。物語をリズムごともしっかりからだになじませるよう、くりかえし音読しながら、少しずつ書き写して一冊の本として再現していく。「原書」＝日本語のものと読み合わせることはしない。けれども、まれに、どうしても調べなければと感ずることがあり、「原書」と照らし合わせることになる。放課後、いつものようにひとりで図書室に入り、カード式の見録を使って蔵書を調べる。古い紙のにおいがする。書架を歩いて本を見つけ、窓ぎわの席でノートと照らす。

“My brother Naoji was called up while still at the University and was sent off **to some island in the South Pacific**. We have had no news of him, and he is still missing, even after the war. Mother has resigned herself to never seeing Naoji again. At least this is what she says, but I have never once “resigned” myself. All I can think, is that we certainly will see him again.” (Osamu Dazai, translated by Donald Keene, 1968 [1947], *The Setting Sun*, Penguin Classics, 16, 太字はわたし)

「弟の直治は大学で中途で召集され、**南方の島**へ行ったのだが、消息が絶えてしまって、終戦になっても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢えないと覚悟している、とおっしゃっているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない、きっと逢えるとばかり思っている」（太宰治. 1988[1947]『斜陽、他一篇』岩波書店、二十二頁、太字はわたし）

太宰治が「南方の島」と書いたものを、ドナルド・キーンは「^{some island in the South Pacific}南太平洋の島」と訳している。一九四七年に出版されたこの作品の英訳は一九五六年に初版されている。太平洋戦争は一九四一年から一九四五年までだということは、わたしも知っている。けれども、わたしは知らない。^{Naoji}直治が送られた島にはどんな人びとがどんなふうに住んでいたのか。その島は、現地の人びとによってどう呼ばれているのか。少なくとも、それは「南太平洋の島」とか「南方の島」ではないだろう。直治はその姉や母親にとって「行方不明」になったけれども、その島で暮らしていた人びとには、動物たちには、木々には草花には、土には水には空気には、何が起きたのだろうか。そして、いまは？ 白昼、白い服、暗殺。血であがなったもの。

三匹の生まれたての猫

友だちは、
生まれつきの病気で、
食べものを食べる気持ちが強すぎて、
ふくふくとふとり、

わたしは、
こころの病気で、
食べものを食べる気持ちが弱すぎて、
きえるようにやせ、

白木蓮の木に隠れて、
スナック菓子をかじっている友だちと、
三匹の生まれたての猫を
飼うことにした。

三匹の生まれたての猫、
おかあさんはいるのにいない、
まっしろで青いひとみ、
耳が聴こえないかもしれない。

友だちは、
ゆっくりゆっくり学ぶ、
子どもたちの学校に通って、
日曜日に猫を愛でにきて、

わたしは、
いそいでいそいで学ぶ、
子どもたちの学校に通って、
おじいちゃんに猫をまかせて、

白木蓮の木に隠れて、
ことばの代わりにチョコをくれる友人と
三匹の生まれたての猫を
育てることにした。

三匹の生まれたての猫
A cat has nine lives
³それぞれに九つのたましい、
三つで遊び、三つで放浪し、
さいごの三つでひとと一緒にいる。

友だちとわたしは、
三匹の生まれたての猫を、
白い毛布のバスケットに入れて、
Playa de España
スペイン海岸にピクニックにでかける。

大陸と大陸のあいだが、
もっとも近くなるジブラルタル海峡、
いつかは渡れるようになるよ、と、
三匹の生まれたての猫のひたいをなでる。

船にのれば、
風にのれば、
波にのれば。

³ 執筆メモ：英語のことわざ。詩に忠実に、Each of them/Each one has nine lives などとするか？

三匹の生まれたての猫、
にゃあ、と答える。
知らないの、もう泳いで渡ってきたよ。
^{Antes de morir claro}
4 まえに死ぬまえにね。

スペイン海岸 (Playa de España)

Unya、もう一回、言わせてね。
オーケイ、ez dîsa bêjim⁵。

海までの道を走る、波の上を走る、誰にもつかまらない。
Modagan ko padulong sa dagat, modagan ko sa ibabaw sa balud, ug walay makadakop kanako.

ある日、駅前の書店の参考書コーナーで「有名大学」の赤本の世界史の問題を眺めていたとき、まっくろな海にずぶずぶと溺れていく感覚におそわれた。視界がせばまり、自分が自分から切り離されていく。死んでしまうかもしれない。店員さんが静かな場所につれていってくれなければ、あのまま倒れてしまったかもしれない。もうできない、壊れてしまう。つぎの朝、おかあさんに言った。一般入試は受けない。おかあさんはとんちんかんなことを答える。アリス、このごろ痩せてよかったわね。わたしの身長は百六十センチ、体重は四十キロを切っている。わたしは食べもののほかにもあらゆるものを四等分するようになった。一時間を十五分ずつのブロックとして切り出し、十五分ごとのスケジュールを立てて、死なないように生きていた。

いったん解放されたのは、三年生の六月のある朝のことだった。担任からの電話で、「有名大学」の指定校推薦枠のひとつをわたしがもらうことが決まったと告げられた。推薦を受ければ、まず落ちることはない。それは行きたいと思っていた大学のイスパニア語学科ではなく、別の大学の商学部だったけれど、この大学のほうが「世間的」にはprestigious^{名門}だった。赤の女王から浪人を禁じられている、大学に行かなければどこにも居られない、もうどうでもいい、いまここを終わらせてしまいたい。チェス盤のこのま^すに進むしかない。電話をきってから、母屋に同居しているおばあちゃんに、それからおかあさんに報告する。おかあさんは、おめでとう、とほほえむ。そのまま、わたしは東大生の母になりそこなったのね、と白い声でつぶやく。

おとうさんは、ただ嬉しそう。どの大学に行くかは聞くけれど、何を学ぶことになるかは何も聞かない。この大学に入ったあとに「アメリカ」に留学したい、ハワイの大

⁴ 執筆メモ：正しくは、antes de morir, claro と、カンマが入る。

⁵ クルド語。

学がいい、と自分でも思いがけず言葉にすると、それはいいね、でもハワイではなくてメインランド^{本 土}にきなさい、そうだね、いちど TOEFL も受けてみなさい、むこうの大学の学部^{Advanced American English Course}に留学するために必要だから、それからこれを使いなさい、と「リングフォン米語上級コース」を渡してくる。夏休みのあいだそのテープを浴びるように聴き、ノートに書き写し、シャドーイングし、ディクテーションし、ETS⁶の公式問題集を解いて、秋に TOEFL を受けたら、もう十分に大学に留学できるスコアだった。日本の大学入試の英語はあんなに苦手なのに不思議だった。息をふきかえす。

三年生の後期（この高校は二学期制だった）、国立文系コースにいたものの、もはやわたしはほとんど学校にいかなくなった。もともと自由な校風であるし、進路の決まった生徒にかまうような時期でもない。誰にも咎められることなく、制服のまま電車に乗り、終点の駅で降り、海に浮かぶ小さな絵のような島をめざす。こんもりしたみどりに白いライトハウス。島にむかう広やかな歩道から海岸をみおろす。灰色にみえる砂浜には波にけずられて丸くなったガラスのかけらが混じっているはず。もう一度、顔をあげて、こんどはゆっくり走りだしてみる。潮っぽい風が気道をとおって肺をふくらませる。右手の遠くのほうに富士山が浮かんでいる。海と空がまじわるラインをみさだめようとする。右腕をのばして、水平にぐるとまわす。

そこは太平洋^{the Pacific Ocean}なのに、ここには「スペイン」が浮かんでくる。あるとき、教室でだれかが「スペイン内戦五十周年だよ、ロルカを読もう」と話しているのが聞こえてきて、そのことばはわたしに取り憑き、書架をさまよわせ、ガルシア・ロルカのほかにラモン・センデルを日本語で読むようになり、高校卒業の記念におばあちゃんにスペインに連れていってもらい、ピカソの「ゲルニカ」を見に行くことにもなっていた。けれども、わたしはわかっていなかった。スペイン内戦（一九三六年～一九三九年）がどんな戦争かを。人民戦線とファシズムが激突し、人民戦線の敗北が第二次世界大戦の前哨戦と位置づけられることを。なによりも、そのころ、大日本帝国^{Empire of Japan}がアジアでなにをしていたのか。ひとは、侵略のために海を渡ることがあることを。

⁶ Educational Testing Service の略。アメリカの非営利教育団体で TOEFL の主催団体。世界中で英語力や学力を測定する標準テストの開発と実施をおこなっている。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan

**Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama**

Chapter 6: Shonan — Like a Cat Crossing the Sea

Shonan: Like a Cat Crossing the Sea

The man in white was assassinated

Running down the road to the sea, running over the waves, caught by no one.

It was the first summer vacation after I entered high school. I was getting ready to go to school for the sports festival preparations, nibbling on bread, sipping milk, half-watching the TV. At the top of the airplane stairs, a man in white lay face down. His face was hidden. Life had drained completely from his arms, legs, and torso, surrendered to gravity. Blood was flowing. Shida (the ferns that stay close to me) muttered in a low voice: *"He's been shot. In broad daylight. Assassinated, in broad daylight."*

At Manila Airport, before the eyes of so many people, just as he had predicted, his life was stolen in an instant. He was the leader of the opposition, a threat to the dictatorship. He had returned from exile in the United States, only to die before setting foot back on the soil of his homeland. The TV screen froze, stabbing at my heart. I grabbed my bag and hurried to the station. The blouse of my friend's uniform, when I met her, looked paler than usual, almost ghostly white.

From the nearest station I walked through the maze of residential streets, climbing the gentle slope to that *elite public high school*. Its motto was: *"Always do what you are afraid to do!!"* (a line often attributed to Henry David Thoreau, meaning "Take on the most difficult path"). But I did not know that at the time. What I did know was the school's official slogan: "Extraordinarily high achievement in both academics and athletics for each student."

I had always wished that in my next life I might be spared a world with "physical education." But here, swimming and jump rope were required subjects, and those who failed to reach their quotas were made to attend extra lessons. There were even absurd names for them: *"supplementary swimming"* or *"The Jump Rope Friendship Club."* Teachers taught patiently, but still one had to keep at it, as if one were required to believe wings might sprout and carry you into the air someday. It felt so futile. And yet, the students who were good at sports accomplished it all so effortlessly, smiling as they did so.

At that time there were many children, and even this public high school was overflowing with students. There were 540 in each grade, 45 in each class, with slightly more boys than girls. Overwhelmed by the noisy crowds, I often slipped out of the classroom and wandered into the library, burying myself in the forest of tens of thousands of books,

sometimes letting Shida cover my face with their hands until I dissolved into the words and fell asleep.

Even so, I had one friend. During the freshman training camp, when my period started unexpectedly, she quietly handed me a pad without a word. Unlike me, she was good at athletics—she could triple jump with a rope, swinging it side-to-side with ease. She invited me to run with her at lunchtime toward the sea, but the ocean was always too far away. We would turn back at the Yakult factory and return to school.

One spring break, after finishing extra jump-rope lessons, I flew alone to Hawaii. My father, there on sabbatical, met me at the airport. He introduced me to his colleague, an American woman named Sally Nakama. With her brown skin, dark eyes, and chestnut-black hair, she looked straight into my eyes when she spoke, and at the end of her sentences, she would tighten her expression slightly around her eyes.

One day she took me to the Pearl Harbor Visitor Center. She told me that her grandfather had been a firefighter, injured in the surprise attack by the Imperial Japanese navy on the morning of December 7, 1941⁷. Afterward, as a Japanese American, he was sent to an internment camp. Even in old age, until his death, he would sometimes suffer seizures.

“Pearl Harbor, in the language of the Native Hawaiians, is called *Wai Momi*,” she said. “During the Hawaiian Kingdom, it was a rich fishing ground. But under American rule a naval base was built, and the sea floor was polluted. I wonder how Okinawa is now?” she asked suddenly. I had no answer.

A Road Leading Nowhere

Dozing in the high school classroom, I slipped lightly through the mirror and landed in the room of the Looking-Glass world. Here, there were no adults to drive me away from the fireplace. Even if there were adults staring at me from beyond the mirror, they could not catch me. “*Don’t dawdle! Hurry, or before you’ve seen the other parts of this house, you’ll be forced back through the mirror!*” I decided first to see the garden, dashed from the room, and went downstairs. Strictly speaking, I was not running: with just my fingers touching the banister, my feet never touched the stairs, and I floated downward. In the garden, where the flowers spoke, I met a tiger lily. “*If the soil is too soft, flowers always fall asleep. For flowers to speak, they need firm ground,*” it told me. Before long, the Red Queen appeared.

“Where did you come from?” the Red Queen asked. “And where are you planning to go? Raise your head and speak properly. Don’t fidget with your fingers.” Avoiding her piercing gaze, I did my best to explain that I had lost my way. But the Queen smiled faintly. “*Your road, you say? Such a thing does not exist in this country. All the roads here belong to me. But still, why have you come here, I wonder?*” she asked, her voice a little gentler. “*Bend your knees and make a curtsy. While you’re thinking what to say next. It saves time.*” Before me stretched a strange countryside, small squares enclosed by

⁷ Hawaiian local time; in Japan, it was the pre-dawn hours of December 8, 1941.

straight streams and hedges, spread out like a vast chessboard. Unlike the Queen of Hearts, the Red Queen did not recklessly cry out “Off with their heads!”

If I could be a pawn here, or even become a queen, that might be interesting. *“That is easy enough,”* said the Queen with a smile. *“If you like, I shall make you a pawn of the White Queen.”* I was told that if I began from the second square and advanced to the eighth, I could become a queen. At that moment the Queen seized my hand and suddenly began to run. Her speed was overwhelming, and keeping up was all I could do. Still, she kept shouting, *“Faster! Faster!”* However far we ran, the trees and scenery did not change at all. It was as though the world itself stood still, and no matter how fast we ran, we overtook nothing. *“Faster! Don’t try to speak!”* the Queen shouted. I had no intention of speaking. But I felt as if I might never be able to speak again. That was how short of breath I was.

The Red Queen taught me how not to “lose” on the chessboard. Run faster, she said. You have good grades, so you must apply to a university with a name. A year’s delay is forbidden. The faculty doesn’t matter. Medicine and art are off-limits. All paths are mine. Your road cannot exist. You need not obey me, but then you will go nowhere. Do as I say, it is for your own good. Her curse was warm and soft, clinging to me like raw silk that would never unravel. But it was all right. Someday I would escape. For now, I must keep running so as not to anger her. I must keep my body light so the curse will not seep in. To keep evil from accumulating inside me, I would divide food into four parts and eat only one. To keep myself from going mad.

Some island in the South Pacific, a southern island, an island of people

“Alice, wake up.” Shida shook me, and when I raised my head from the desk, my Japanese teacher was standing there. One of his eyes was a glass eye. I gazed vacantly at the one that did not move, and he handed my notebook back with, “Here you are.” Concerned about how I kept sleeping in class, he and my homeroom English teacher had prepared a self-study notebook for me. In ordinary exams my grades were good, but in the university mock exams I could not breathe and drowned.

I was obsessed with “translation,” that is, reading Japanese novels in English. I do not know why. Perhaps because, in elementary school, the Queen of Hearts had taken away my English books, and in the cave library I was made to read only Japanese books, which hurt me like water seeping into my lungs. I read the stories aloud again and again, trying to absorb their rhythm into my body, and copied them little by little, recreating them as a book. I did not compare them with the “original” Japanese. But rarely, when I felt I absolutely must check, I would look at the original. After school I would enter the library alone, search the holdings using the card catalog, follow the smell of old paper to find a book, and sit by the window comparing it with my notebook.

“My brother Naoji was called up while still at the University and was sent off to some island in the South Pacific. We have had no news of him, and he is still missing, even after the war. Mother has resigned herself to never seeing Naoji again. At least this is what she says, but I have never once ‘resigned’ myself. All I can think, is that

we certainly will see him again.”
(Osamu Dazai, *The Setting Sun*, trans. Donald Keene, 1968 [1947], Penguin Classics, 16, italics mine)

「弟の直治は大学で中途で召集され、**南方の島**へ行ったのだが、消息が絶えてしまつて、終戦になつても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢えないと覚悟している、とおっしゃっているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない、きっと逢えるとばかり思っている」（太宰治. 1988[1947]『斜陽、他一篇』岩波書店、二十二頁、太字はわたし）

Dazai wrote “a southern island,” but Donald Keene translated it as “some island in the South Pacific.” This work was published in 1947, and the English translation first appeared in 1956. The Pacific War lasted from 1941 to 1945. I knew that much. But I did not know what kind of people lived on the island where Naoji was sent. What the people who lived there called it. At the very least, it could not have been only “some island in the South Pacific” or “a southern island.” Naoji became “missing” to his sister and mother. But what of the people who lived on that island, the animals, the trees, the flowers, the soil, the water, the air? What happened to them? And now? Broad daylight. A man in white. Assassination. Blood that was the price.

Three newborn kittens

My friend was,

born with an illness,
her urge to eat too strong,
becoming plump and round,

while I was,

with a sickness of the mind,
my urge to eat too faint,
growing thin, as if to vanish.

Hidden by the white magnolia tree,
my friend nibbled on snacks,
and together we decided
to keep three newborn kittens.

Three newborn kittens,
though they had a mother, she was absent,
pure white with blue eyes,
perhaps unable to hear.

My friend,

attending a school
for children who learn slowly, slowly,
would come on Sundays
to adore the kittens,

while I,

attending a school
for children who learn in haste, in haste,
left the kittens to my grandfather,

and together with the friend
who gave me chocolate in place of words,
hidden by the white magnolia tree,
I raised three newborn kittens.

Three newborn kittens.

A cat has nine lives, each with nine souls—
three for play, three for wandering,
the last three for being with humans.

My friend and I
put the three newborn kittens
into a white-blanketed basket,
and went for a picnic
to the Playa de España, the Spanish shore.

Between one continent and another
lies the Strait of Gibraltar,
the narrowest of straits.
Someday you'll be able to cross,
I whispered, stroking the kittens' foreheads.

If you sail on a ship,
if you ride the wind,
if you ride the waves.

Three newborn kittens.
Meow, they answered.
Don't you know? We already swam across.
Antes de morir claro—before we die, of course.

The Spanish shore (Playa de España)

*Unya, let me say it again.
Okay, ez dîsa bêjim⁸.*

Running down the road to the sea,
running over the waves,
no one can catch me.

*Modagan ko padulong sa dagat,
modagan ko sa ibabaw sa balud,
ug walay makadakop kanako.*

One day, while looking at world history questions in the entrance-exam guides for “prestigious universities” at the station bookstore, I was seized by the sensation of sinking into a pitch-black sea. My vision narrowed, I was cut off from myself. I thought I might die. If the clerk had not led me to a quiet place, I might have collapsed right there. I can’t do this anymore, I’ll break. The next morning I told my mother: I won’t take the general entrance exams. My mother answered with something absurd. *Alice, you’ve gotten thinner lately—how nice.* I was 160 centimeters tall, my weight had dropped below 40 kilograms. I began to divide not only food but everything into quarters. I cut an hour into fifteen-minute blocks, made a schedule for each quarter hour, living just enough not to die.

It was not until a morning in June of my senior year that I was released. My homeroom teacher called to say I had been chosen for one of the designated school recommendation slots to a “prestigious university.” If I accepted, I would almost certainly be admitted. It was not the Spanish department at the university I wanted, but the commerce faculty at another school, considered more “prestigious” by society. The Red Queen had forbidden me a year’s delay. If I did not go to university, I would have nowhere. I no longer cared. I just wanted to end this. I had no choice but to advance to that square on the chessboard. After hanging up, I told my grandmother, who lived with us, and then my mother. *Congratulations*, my mother said with a smile. Then, in a white, faint voice, she added: *So, I failed to become the mother of a University of Tokyo student.*

My father was simply happy. He asked which university I would attend, but not what I would study. When, unexpectedly, I said aloud that after entering this university I wanted to study abroad in the United States, preferably in Hawaii, he answered: That’s fine, but not Hawaii—go to the mainland United States. Yes, you should take the TOEFL once; it’s necessary if you want to study in an American undergraduate program. And here, use this. And he handed me the Lingaphone *Advanced American English Course*. Through the summer I bathed in those tapes, copying into my notebook, shadowing, dictating, solving the official ETS⁹ practice tests. By autumn, when I took the TOEFL, my score

⁸ In Kurdish: “Let me say it again.”

⁹ ETS is short for *Educational Testing Service*, a U.S.-based nonprofit educational organization. It administers the TOEFL and develops and conducts standardized tests to measure English proficiency and academic skills worldwide.

was already good enough for study abroad. Strange, since I had always struggled with the English of Japanese university entrance exams. I breathed again.

In the second semester of my senior year (this high school had only two terms), I was in the humanities track, but I hardly attended school anymore. It was a liberal school anyway, and by then no one bothered with students who already had their university paths decided. Without anyone reproaching me, I rode the train still in my uniform, got off at the terminal station, and headed toward a small island floating in the sea like a painting. Lush green crowned with a white lighthouse. From the broad walkway leading to the island, I looked down at the coast. On the gray sand there must have been shards of glass, rounded by the waves. Once again I lifted my head, and this time I tried running slowly. The salty wind passed through my airways, filling my lungs. In the far distance to the right floated Mount Fuji. I tried to make out the line where sea and sky met. Stretching out my right arm, I swung it around, level with the horizon.

Though it was the Pacific Ocean, in my heart arose the image of “Spain.” One day in class I overheard someone say, *It’s the fiftieth anniversary of the Spanish Civil War—let’s read Lorca*. The words possessed me, set me wandering the library shelves, led me to read García Lorca and also Ramón Sender in Japanese, and even took me with my grandmother to Spain as a graduation gift, to see Picasso’s *Guernica*. But I had not understood. I had not understood what kind of war the Spanish Civil War (1936–1939) was. That the Popular Front clashed with fascism, and that the defeat of the Popular Front is now seen as the prelude to the Second World War. Above all, I had not understood what the Empire of Japan was doing in Asia at the same time. That people sometimes crossed the sea for the sake of invasion.